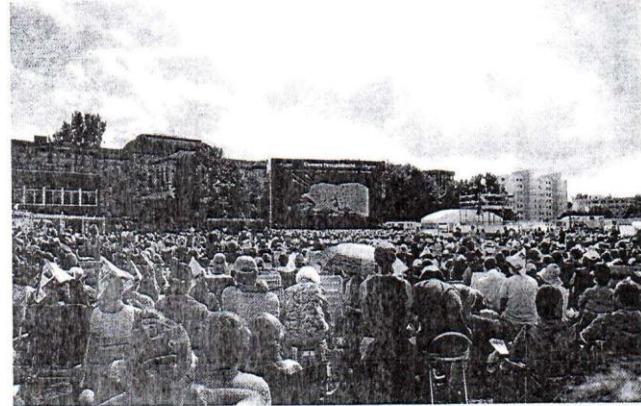


REPORT

「ローエングリン」ハリック・ビ:『ミュージカル』
© Enrico Nawrath Bayreuther Fei «Stipiele»



海外
REPORT

K. Kammeroper Salzburg Richt. Heiko Siegel der Monteverdi's "L'incoronazione di Poppea"

続・第100回バイロイト音楽祭より「タンホイザー」「ニーベルングの指揮」「ローエングリン」

第21回

ラインスベルク城のカンマー・オペラ祭「ポツベアの戴冠」ブルミエ

中田千穂子

(カラーページバイロイト音楽祭より続き)

「タンホイザー」

バイロイト音楽祭では幕間に1時間の休息を取ることがしきりになつてゐる。しかし今年のバウムガーテン演出に依るブルミエ公演「タンホイザー」では、社会的範囲がテーマの一つとされ、休息の間も引つ切り無しに舞台が続けられ、フォルクスピューケ劇團のブローベーのビデオを放映したり、团员たちが「完全なる脱構築主義」を唱えたりして、2回目の「タンホイザ」公演では指揮者トマス・ヘンゲルブロックにブーが浴びせられた。ドレスデン版のファクシミリを用いた精巧な演奏であったが、劇的な緊張感に欠け、彼の極端なデュナミックやテンボによる試みに然程の効果は得られなかつた。エリザベートのカミル・ニールントの歌唱は着実であったが、情愛の気持ちを抱いていたエリザベートがオペラの進行と共に救済する聖女に変身するプロセスを如実とするに至れなかつた事は遺憾であった。第3幕でエリザベ

トはヴォルフラン（優れた歌唱のミカエル・ノットシュ）の手を借りてバイオガスのタンクの中に消える。ヴォルフランがタンクの蓋を締めた後、「夕星の歌」を何故に臨月間近なヴェヌスを讚えて歌つたのか、不可解であつた。（バイロイト祝祭劇場、8月1日所見）

第3回子供の為の「ニーベルンゲンの指環」

バイロイト音楽祭の「子供の為のワーグナー」シリーズの3回目。今年は「リング」が新制作され、大好評を博した。ワーグナーデトラロギーは上演に15時間90分掛かるが、演出家マキシミリアン・フォン・マインブルクと指揮者ハートムート・カイルにより、4歳から6歳の子供を対象に、2部構成で休息をはさみ1時間半に短縮された。プローベ・ビューネの収容人数は200名、30名編成のフランクフルト（オーダー）・ブランデンブルク州立管弦樂團が、白一色のヴァルハル城とトリネコの下に位置して、「リング」の名曲・「ラインの黄金

3年目「ローエングリン」のパブリック・ビューイング

恒例のワーグナーの無料観賞のパブリック・ビューイング。今年は8月14日にハンス・ノイエンフェルス演出によるイタチの実験室を舞台にした「ローエングリン」と子供の為の「リング」の生中継に2万人の

聴衆が詰め掛けた。良い音響で観賞出来るよう、スピーカーを86ヶ所に取り付けて計27000ワットの出力でサウンドが拡大された。終演後、スター歌手たち・クラウス・フロリアン・フォーケト（ローエン

第21回ラインスベルク城のカンマー・オペラ祭「ポツベアの戴冠」ブルミエ

「ポツベアの戴冠」ブルミエ

ドイツのブランデンブルク州に在るラインスベルク城で毎年催されているカンマー・オペラの国際声楽コンクールは、若手オペラ歌手の登竜門として注目されている。今年はベルリン（1月8日～11日）とサンクト・ペテルブルク（1月14、15日）で開催され、45ヶ国から約400名もの応募があった由だ。そして受賞者40名の歌手たちにフェスティヴァル期間中に催される4本のオペラに出演するチャンスが与えられた。モンテヴェルディの「ポツベアの戴冠」ブルミエには、ファイナルに残った12名の歌手たちが出演した。指揮者ラファエル・アルベルマンと演出家アリラ・ジークガートの独創性による上演は通常用いられているかのアベル版は歌のパートが朗唱風に書かれており、マルカントなアリアを加える必要があった。そしてモンテヴェルディ時代の典型的な神話的偶像は、アテネ

の前奏曲、ワルキユーレの騎行、ジークフリートの鍛治の歌、神々の黄昏の葬送行進曲等を演奏。12名の若手歌手たちのアンサンブルが素晴らしい、特にワイン国立歌劇場と契約しているマルクス・アイヘ（ウオータンとさすらい）とノルバート・エルンスト（ジークフリートとジークムント）、そしてショティファン・ハイバッハ（ローティ・ミーメ）の歌唱が卓越していた。ライン河の流れ、ニーベルハイム、ナイトヘルーレの場でビデオを放映する等、子供たちがテレビ・ドラマと同じ様に見て楽しめる舞台が工夫されていた。終演後、子供たちが独立してブラーントを浴びさせていた。（8月2日、バイロイトのブローベ・ビューネ）

トは、舞台には殆ど装飾は無く、様式的な衣装（マリー・ルイーゼ・シュトラント）と共に素足で演じられたが表現舞踊家でもあるアリラ・ジークガート演出に依る的確な身体表現で劇的、コミック的、官能的な場面が常に離弁的に物語られた。特に第1幕第3場でセネカがポツベアとの結婚は絶対にならぬとセローネに進言して元老として正道の道を貰くセネカ（資質豊かなバスのジエレミエ・プロカード）の演技と歌唱に魅了された（写真）。フィナーレのネローネとポツベア（アウェリエ・フランクとアン・ギュッタ）の瑞々しい愛の一重唱も印象深い。就中、優れたコンティヌオ奏者でもあるラファエル・アルベルマン指揮、Concerto 4plusの卓越した演奏から深い感動が得られた。終演後、聴衆の拍手に合わせて演出家アリラ・ジークガートと12人の新人歌手たちが手を取り合って踊った。最後に同フェスティヴァルの主宰者ジークフリート・マツスが全員に花を一本ずつ贈呈し、その後も喝采が鳴り止まなかつた。（7月22日、ラインスベルク城）